

非認知能力って何？



このごろ、「非認知能力」という言葉をよく聞くようになりました。簡単にいうと、学力や運動能力のような「認知能力」以外の能力のことです。

一見関わりがないと思われがちなのに、非認知能力が、その後の学力や、未来を生き抜くチカラとも関連していることが、近年の研究でわかってきました。

非認知能力

意欲 自制心 自信
楽観性 思いやり 忍耐力
コミュニケーション能力 など



思考力 判断力
表現力 など

認知能力

読み書き 語学力 計算力
運動能力 IQ(知能指数) など



おとなが子どもにできること

- 夢中に遊ぶことのできる環境をつくる
- 子どもの主体性を尊重する
- スキンシップなどの愛着形成 など

◇協働する力

社会情動的な能力ともよばれるこの力がなぜ今求められるようになってきたのか…。

それは、A I にはできない仕事として、複雑な社会的関係が必要となる高次な思考判断を要する仕事ができる資質能力が求められているからです。

協働して新たな知識や価値を創造するためには、他者の視点に立ち、他者への共感性をもち仕事をしていくことが必要になります。

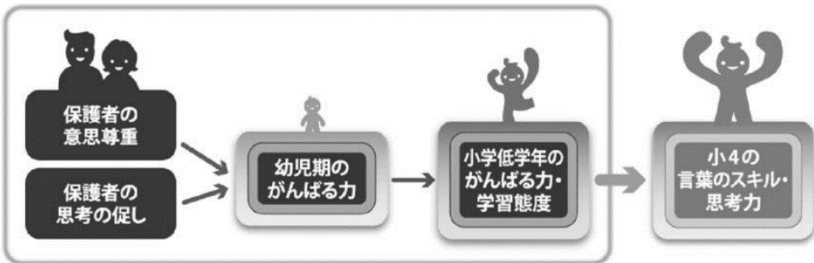
また、難しい課題達成のためには、粘り強く挑戦し、創意工夫するような側面が重要です。

つまり認知的なスキルだけでなく、社会情動的スキルを育成することの重要性が社会の変化と共に強調されてきているのです。

◇学びに向かう力

東京大学の秋山教授とベネッセ教育総合研究所の調査によれば、①生活習慣、②学びに向かう力、③文字・数・思考の3要素を設定し、「幼児期から児童期への家庭教育縦断調査」として、3歳から現在小学校6年生までの調査を行っています。

それによれば、第一には、幼児期に「物事をあきらめずに



挑戦する」といった『がんばる力』が高いこともほどこ、小学校低学年（1〜3年）でも「大人に言われなくても自分から進んで勉強する」などの学習態度やがんばる力が高い傾向にあるということです。

第二には、保護者（保育者）のかかりとして、幼児期に意欲を尊重し、思考を促すことが小学校低学年での子どものがんばる力や学習習慣、そして、小学校4年での言語スキルや思考力にも影響を与えているということです。

◇環境教育

たけの子では「木・火・土・金・水」という万物を創るすべての元素に触れることができる「五行の遊び」を大切にしています。それもまた、子どもたちの非認知能力を育てることに繋がっています。

施設の内外は生き物で溢れ、子ども達（大人も）は、日々その中で生きています。

そのことがどれほど尊いかけがえのないものか…。捕まえた虫や爬虫類を園に持ってきて、エサになる生き物を探す。そんな、たけの子では日常ともいえる光景が一般的な園では難しいということを知りました。

「先生がいろいろの？」他園に通っているお子さんを持つているボランティアの方がお子さんにそう言われたと教えてくれました。

わたしたちも自然の一部。食べて遊んで（仕事して）、休む、寝る。それを自ら選び、協働する。そんな当たり前の日々の中から、この非認知能力は育まれるのだと思います。

辺見妙子